

国際交流基金事業外国人学識者の招へい

ホームページ公開用報告書

学識者 Srijit Mishra

招聘責任者 農学部 岡通太郎

Srijit Mishra 氏はインド農業の持続可能性についての学際的研究であり、とりわけ天水農業技術の応用、またそれと強く関連する農民の貧困問題についての考察（土着技術論、経済開発、ゲーム論、ネットワーク構築、貧困指標、農民スイサイド問題など）を行っている。インド国内での彼の評価は高く、今年から農業発展を専門に扱う国立チョウドリー発展研究センターの所長に就任している。国際化が進展する中で、アジアの大国インドの農業・環境を専門に研究する氏を明治大学農学部へ招請することを通じて学生・教員の国際理解を高めることを目的にお越しいただいた。

来日後、インド農業の持続可能性についての総論的講演を全学オープンで開催し、さらに環境技術普及についてやや専門的な研究会（農学部を中心とした院生、教員、および専門研究を目指す学部生を対象）を実施していただいた。学際的な研究を行う氏は文理の隔てなく知的貢献をもたらした。講演および研究会において氏は一貫して持続可能性の鍵が貧困層の持つ在来農法を有効活用できるかどうか依存している点を強調した。

本招へい事業で得られた新たな知見として、主に以下の 3 点が挙げられよう。1) 経済成長が著しいインドであるが、都市農村比較における貧困率の推計には人口動態的な問題があり、見た目の貧困率の改善よりも実態は深刻であること、2) 農業生産性の向上は、多投入型農法の導入であると同時に、農家所得におけるリスク管理を相対的に困難なものとし、気候変動などのリスクに脆弱な体質へと移行している（それによる自殺者の増加も指摘されている）、3) 気候変動による不作リスクが高まると仮定すれば、持続可能な農業を推進していくためには在来農法のような低投入型の所得リスク管理に頑強な作付け体系（ミレットの栽培など）が必要である。

特に、最後の点については、彼が所長を務めるオリッサ州立の研究所において、州政府を巻き込んだプロジェクトが発足したばかりであり、それは高投入型の米麦生産に特化してきたインド農業の歴史における大きなエポックメイキング的プロジェクトとなる可能性も秘めている。オリッサ州には伝統農法を継続している指定部族などのマイノリティーも多く、そこでは個別農家の独立した経営だけではなくコミュニティとしての農業経営も重要な役割を果たしており、地域づくり・有機（伝統）農業・持続可能性などといったキーワードを軸に日本との共同研究の可能性についても言及された。

以上